

ことばと思考

今井むつみ 著

私たちは、ことばを通して世界を見たり、ものごとを考えたりしているが、日本人と異なる言語を話す外国人では、認識や思考のしかたが異なるのだろうか。教育に関わる者として、ことばの獲得が子どもの思考に与える影響などについて、認知心理学の立場から興味深い考察がなされているので参考になる。

序章「ことばから見る世界」、第1章「言語は世界を切り分ける」、第2章「言語が異なれば、認識も異なるか」、第3章「言語の普遍性を探る」、第4章「子どもの思考はどう発達するか」、第5章「ことばは認識にどう影響するか」、終章「言語と思考」で構成されている。

序章「ことばから見る世界」では、ことばは世界への窓であり、日常生活では特に意識することなくことばを通して世界を見たり、ものごとを考えたりしている。そこで、ことばが私たちの世界の見方、認識の仕方とどのような関わりを持っているかを、「水」「緑」「左」ということばを例示し、これらのことばを知らない子どもはどのように理解しているのか、また「緑」「左」に対応する言語を持たない人々の存在から、ことばで世界を切り分けられることが紹介されている。また、ここで扱う「思考」と「認識」についてのとらえ方が具体的にわかりやすくまとめられている。

第1章「言語は世界を切り分ける」では、ことばにより世界を切り分けると、想像するよりはるかに多様であると指摘している。そこで、「色」の名前を取り上げ、「青」と「緑」について、英語の「blue」と「green」では、その色の境界が異なることを例示している。また、

「1本」「1枚」のことばを例にモノの分類の仕方など他にもいろいろな事例が紹介されている。

第2章「言語が異なれば、認識も異なるか」では、1990年代から認知心理学からの知見により、これまでの言語学や人類学から、言語が違ふと思が異なるというだけの視点でなく、言語の影響が認知プロセスや脳の情報処理の観点にも注目し、ことばと認識の関係が述べられている。具体的な例として、日本語では区別しないが、英語では数えられるモノと数えられない物質の名前を文法的に区別し、可算名詞と不可算名詞は表現上区別されることを取り上げ、物体と物質の存在論的違いなど、いろいろな事例が取り上げられている。

第3章「言語の普遍性を探る」では、言語による区別があってもなくても、人には普遍的に存在する知覚メカニズムや概念理解が存在する観点に立って、言語に関わりなく人の思考には共通の基盤があるのかについて検討している。言語の違いは見つけやすいが共通性を見つけることは容易でなく、「モノの名前の付け方」「色の名前の付け方」などからその普遍性に迫っている。

第4章「子どもの思考はどう発達するか」では、人間は動物の中で唯一言語を持つ存在であり、人間の思考がことばを持つことによって他の動物とどのように異なり、人間の子どもの思考は言葉を学習することでどのように変わるのかについて述べられている。

第5章「ことばは認識にどう影響するか」では、言語が日常生活の中で、どのような場面とどのように認識に影響を与えているかが述べられている。

終章「言語と思考」では、異なる言語の話者は互いにわかりあえるのかについて、バイリンガルになることを例にまとめている。

(岩波新書、B6判227頁、800円) (山下省蔵)